

日本人の評価から見た中級日本語学習者の会話の問題点 - 会話クラスの改善を目指して -

金久保 紀子

要 旨

筑波大学留学生センターで開発中の中級前半者向け教材の会話クラス該当部分を紹介する。それを使って学習した学習者の自己紹介の録音資料を使って、日本人への聞こえ方の調査を実施した。その結果、中級前半の学習者の日本語は日本人にはあまりきちんと伝わっていないことが明らかになった。日本人は学習者の名前や国などの基本的な情報を必ずしも正確に聞き取れていないこと、文型や表現などの情報が聞き取りメモにはあまり現れてこないことがわかった。文型や表現などの情報は必須の情報を聞き取るための環境として必要であることが予想される。また学習者が能動的に行えるような話題も日本人の聞き取りに関係がある。今後、会話クラスでは音声・音韻的な練習を重視すること、学習者の話したい内容を重視した練習を行うことが必要である。

【キーワード】 中級前半レベル 会話クラス 発音指導 日本人の評価

The Analysis of Problems in Conversation of Intermediate Japanese Learner through Japanese Evaluation : Towards the improvement of conversation class

Kanakubo, Noriko

The new Japanese materials for the intermediate learners of Japanese have been preparing. To know the role of conversation part of the materials, an investigation about how Japanese hear and evaluate learner's Japanese was conducted with using the recorded speech of self-introduction. As results, some points became clear, 1) Japanese could not catch the very basic information, such as one's name and a country well, 2) Japanese could not take notes about patterned expressions and grammar. It is forecasted that patterned expressions and grammar are useful as preparation to catch essential information. And there are close relation between what learners are talking, how they are eager to talk about it and Japanese evaluation. Towards the improvement of conversation class, the emphasis of phonetic and phonemic practice and the practice of the topics of what learner want to talk are very important.

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは1995年から中級教材の開発に取り組んでいる。中級前半の学習者を対象に、各技能のバランスのとれた学習ができるような教材を目指して、改訂を重ねている最中であり、筆者は開発の当初から、主に文法と会話のクラス担当者として関わっている。

開発中の中級教科書の中に「話してみよう」と題して、主に会話クラスで扱うべき部分がある。筆者は週1回1コマ(75分授業)を10回で1学期とする留学生センターの時間割⁽¹⁾に沿い、「話してみよう」を使用して会話の指導を行った。指導の過程で各課の練習内容はその課の到達目標にあっているか、学習者の発話は十分にその課の内容を反映しているか、などの疑問点が出てきた。本稿は、会話クラスの学習者の会話を評価・分析することを通して、今の指導で問題となる点を明らかにすること、および教材に付け加えるべき新たな視点を得ることを目的としている。

今までの作業グループ⁽²⁾の話し合いの過程から、開発中の教材(仮称『日本語中級文型表現練習1』以下「中級1」)は次のような学習者像を想定していると筆者は認識している。

- 1) 初級(300時間程度)を自国や日本で学習したが、また初級の文法事項を自由に使いこなすには至っていない学習者
- 2) 研究生や大学院生として研究活動や研究室でのコミュニケーションを日本語で行う必要がある学習者

各課は図1のように「表現練習」として各ユニットで話す練習を行っているが、ひとつの課を通して行った練習の成果が「話してみよう」でまとまる形になっている。

<表現練習>

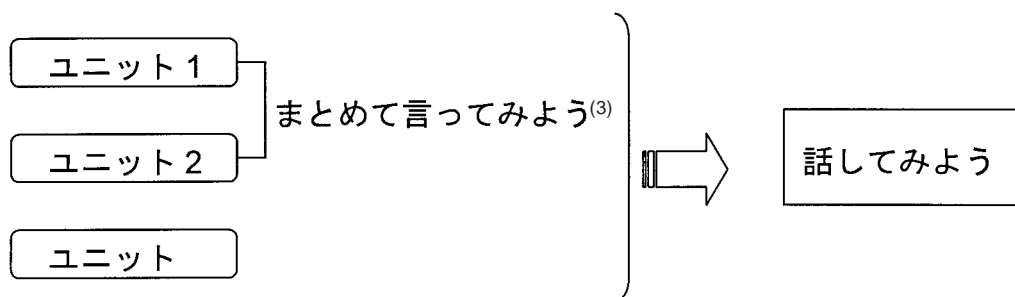


図1 話す技能についての課の構成

以下、「話してみよう」の性格を踏まえて、会話クラスの運営を検討し、実際の会話の録音を聴いた日本人の評価からわかる会話の問題点を考察したい。

2. 会話クラス運営状況

2.1 方針と手順について

会話クラスの運営は学期毎に少々の変更はあるものの、ここ数年、「中級1」⁽⁴⁾を中心に進めている。まず、会話クラスに関わる教材の内容を概観したい。「中級1」は全4課の構成で、各課のタイトルは以下の通りである。

第1課 自己紹介

第2課 依頼する・許可を得る・断る

第3課 事実を述べる

第4課 調査報告(1)

会話クラス10回で扱うために、学期の授業計画を作成し、学生にも配布した。約2回の授業で1課が終了するように計画を立てた。授業計画の大きな方針は

- ・ 初級レベルで学習した文型・表現・語彙を日本人との会話を通して使用し、日本語で話すことに慣れる
- ・ 滞日日数が少ない学習者が多いことを配慮し、日本人と日本語で話すことに慣れる
- ・ 「中級1」の他の授業との連携を深めることにより、十分な練習時間を取り、まとまった発話ができるようにする
- ・ 中級文型クラス、会話クラスを通してできあがった発話を録音し、テープを提出する

の4点である。毎学期20人以上の受講生があり、日本人(学生)ボランティアを各学期5名以上、多いときは10人程度探し、参加してもらった。また、録音課題を提出してもらうことにより、その場での会話練習だけでなく、フィードバックを充実する意図があった。フィードバックはチェックシートの返却、テープの聞き直し、と の両方、の3つの方法で行った。また学期によっては授業時間外に時間を取り、各学生15分程度の個人指導を行う場合もあった。

各課には、その課で使うべき文型・表現が明示されており、「話してみよう」のモデルテープも、「話してみよう」の活動以前に学習者に複数回提示されて、学習者は聴いている。

たとえば、第1課のモデルテープは以下のようである。

私は韓国のリーです。ソウル大学では経済を専攻していました。今年の4月に筑波大学に来て、日本語を勉強しています。読んだり書いたりするのはまあまあなんですけど。話すのがちょっと苦手なんです。日本語がまだ下手で、なかなか上手に話せません。日本に初めて来たときは、日本人がとても早口で話すので、驚きました。留学している間に、日本語がもっと話せるようになりたいので、がんばって勉強しようと思います。ちょっと内気ですが、楽天的な性格です。みなさん、よろしく。

この課で扱うユニットは5つあり、表現練習および学習項目は以下のような内容である。

1. 名前・所属・仕事・専門などを紹介する

～と申します。～を専攻しております。～を担当しております。

2. 仕事・専門などを選んだ理由を述べる

～この仕事を選びました。～この専門を選びました。

3. 趣味・特技・性格を紹介する

～が(可能形)(例：スペイン語が話せます。)～ことができます。～こと／のが好きです。

4. 感想を述べる

～て、～です。(例：大学に入学できて、うれしいです。)

5. 希望・意志を述べる

～たいです。～(意向形)と思います。(例：日本で仕事をしようと思います。)

学習者は下線部分の表現練習を各ユニットで学習し、ペア練習、グループ練習を行った。各課の「話してみよう」の内容は次のとおりである。

第1課 話してみよう

1. この課で習った表現を使って、自分の名前・国・出身・所属・趣味・特技を言ってみましょう。ここでは面接の場面を使って、謙譲表現を練習しましょう。
2. 次の質問に答えましょう。
 - 1) 大学での専門は何でしたか。どうしてその専門を選びましたか。
 - 2) 今どこに所属していますか。どんな仕事／研究をしていますか。
 - 3) どうしてその仕事／専門を選びましたか。
 - 4) どうして日本語を勉強していますか。
 - 5) 将来仕事でどんなことをしたいですか。
 - 6) これから趣味でどんなことをしたいですか。
 - 7) 特技としてどんなことができるようになりたいですか。
 - 8) 10年後はどこでどんなことをしていると思いますか。

教材の組み立てとして、学習者は各ユニットでの練習を繋げればある程度まとまった発話ができるようになっている(前述図1参照)。したがって会話クラスではより日本語らしい組み立て、発音・アクセントなどの練習、全体的な発話のチェックなどに重点が置かれた。学習者が2,3名のグループになり、そこに日本人の学生が入る形のグループ練習に多くの時間を使っている。

2. 2 学習者の会話練習についての意識と問題点

中級学習者の特徴として、一般的に学習背景が様でなく、各技能の能力にばらつきがあること

が上げられるが、会話の能力については学習者の出身や初級で受けてきた会話教育の方法によって、学習者間に大きな差が見られる。日本で旅行をした経験、日本人の友人、バイト経験など、今までの学習環境だけではなく、個人的な経験の差も大きく、また留学生になってからの年月なども会話の能力と無関係ではない。

また、そのような経験の差によるものか、あるいは個人の性格やコミュニケーションスタイルの差によるものかは定かではないが、会話を学習することについて、学習者によって意識に差がある様子も見受けられる。

このような背景の中、積極的に取り入れている日本人とともに会話をする練習スタイルについても学習者によって受け取り方が異なることが学期末の授業評価アンケートから浮かび上がってきた。授業評価に現れたいくつかの意見をまとめる。

< プラスの評価 >

- ・日本人とふだんの生活ではあまり話すチャンスがないので、この授業はよかった。
- ・小さなグループで日本人とたくさん話せてよかった。
- ・日本人は親切に教えてくれてよかった。

< マイナスの評価 >

- ・日本人とはあまり練習できなかった。
- ・手伝ってくれる日本人は一部の学生とだけ話しているので、あまり練習ができなかった。
- ・日本人の話していることがあまりわからなかった。
- ・自分の日本語があまり通じなかった。

これらの結果から、日本人との会話を積極的に評価している学習者がいる反面で、あまり自分の日本語に自信が持てずに、悩んでいる様子がわかる。また手伝ってくれる日本人側の問題、また日本人への教師の指示の問題も大きいと考えられる。何より大きな問題は、自分たちが話している日本語を日本人がわかってきているのか、通じるのかということへの不安感である。

そこで、本当に通じているのか、という点を明らかにするために、日本人に対する調査を実施することにした。

3．日本人による会話の評価

会話クラスの学習者の日本語を日本人はどのように聞いているのかを調べるために調査を行った。会話クラスでの成果は、実際の場面で生かされなければ意味がない。この調査の目的は、自己紹介という日常的に行われる行為を取り上げ、会話クラスで練習した後の録音を日本人に聞かせることで、どのくらい伝わっているのかを明らかにし、その上で会話クラスの指導で不十分なところはどこなのかを探ることにある。

3.1 調査の概要

調査は以下のように行われた。

1) 日時 2000年7月28日

2) 協力者 日本語教師養成コースの授業⁽⁵⁾(日本語学A)を受講している学生

4年生1名 3年生7名 2年生6名 1年生7名 科目等履修生1名
計 22名

3) 方法 ・MDを使用。十分に聞き取れる音量であることを確認した上で開始。

・学習者3人分の会話を各2回聞く。

・聞き取れたことをそのままメモに取るように指示。

・会話MDの内容はいずれも自己紹介

・メモを取った後で質問に答える

使っている文法に間違いはなかったか

発音は聞き取りやすかったか

自己紹介としてどうであったか

その他コメント意見などがあったら書いてもらう

調査に際して、筆者は日本人学生に、「聞き取れたことをそのまま、なるべく多くメモに残すように」という指示を繰り返した。調査中、「間違っているのはどうしますか」という質問があったが、それには「聞こえたとおりにメモをしてください」と答えた。調査に使用した会話の各話者のデータは次の通りである。

表1. 調査に使用した中級学習者のデータ

	文型の成績	会話の成績
A 韓国人女性 20代	A	A
B スロベニア人男性 20代	B	B
C 中国人男 30代	C	C

この調査から期待できる結果は次の3点である。

- ・日本人学生が学習者の話す日本語のどこを聞いているのかを大まかにつかむ。
- ・学習者の会話の中で確実に伝えなければならない情報(名前、国など)が伝わっているのかわかる。
- ・学習者の日本語について直感的に感じていることがある程度明らかになる。

今回の分析対象として第1課になっている「自己紹介」を選んだ。その理由は、話す内容に共通性が高いこと、伝達しなければならない情報がはっきりとしていることの2点である。

「自己紹介」という内容の特徴上、確実に聞いている人に伝わらなければならない情報がいくつかある（名前・出身など）。それらの情報をここでは「基礎情報」と呼ぶ。それ以外にこの課で学習した表現を使っているかどうかという情報も調べた。これらの情報をここでは「表現情報」と呼ぶことにする。

今回は表現練習の内容を踏まえて表2のような情報がそれぞれの情報に当たると判断することにする。

表2．基礎情報・表現情報の分類

基礎情報	1．名前 2．国 3．所属 4．専門 5．住まい 6．趣味 7．性格 8．将来の計画
表現情報	1．はじめまして 等 2．（名前）と申します 3．（出身）からまいりました 4．（専門・所属）であります 5．（専門）を選んだのは、～からです。 等 6．（住まい）に住んでおります 7．（計画など）ようと - / したいと思っています 例：国に帰って仕事をしようと思っています。 8．よろしく 等

分析に用いた録音を文字化した資料によると、それぞれの情報は次の表3のように録音に含まれていたり、含まれていなかったりする。表中 はその情報が含まれていたこと、×は含まれていなかったこと、 は最も適切な形ではないが情報や学習した表現が一応含まれていたことを示している。

表3．各録音における基礎情報

	名 前	国	所 属	専 門	住 ま い	趣 味	性 格	計 画
A								
B								
C					×		×	

表4．各録音における表現情報

	1	2	3	4	5	6	7	8
A								
B								
C			×	×		×		×

- 1．はじめまして等 2．（名前）と申します 3．（出身）からまいりました
 4．（専門・所属）しております 5．（専門）を選んだのは、～からです。等
 6．（住まい）に住んでおります 7．（計画しよう）／したいと思っています等
 8．よろしく

以上のように、使用した録音MDには、基礎情報・表現情報いずれもCをのぞいてほとんどが含まれている。

3．2 結果と分析

まず、基礎情報の聞き取りについて分析する。簡単に全体的な結果を以下に示す。表中 は文字化した資料通りにメモを取っていた人数、 は多少違った部分があったものの大体その通りであった人数、×は全く違ったことを書いている、あるいは何も記述がなかったことを表している。×の箇所に2つ数字がある場合は前が全く違ったこと、後ろが記述なしを表し、1つの場合は記述なしを表している。

表5．基礎情報のメモ書き（単位：人）

n=22

		名 前	国	所 属	専 門	住まい	趣 味	性 格	計 画
A		0	21	9	7	11	19	18	15
		11	0	8	6	3	0	0	5
	×	11	1	5	2 / 6	8	2	2 / 2	2
B		4	14	1	17	8	16	17	0
		12	6	18	2	6	6	3	19
	×	6	2	3	3	8	0	2	3
C		10	15	0	1		7		10
		3	7	3	19		8		7
	×	9	0	19	2		2 / 5		5

表6．表現情報のメモ書き（単位：人）

n=22

		1	2	3	4	5	6	7	8
A		10	3	4	2	0	2	2	2
		3		2	3	4	2	18	3
	x	9	19	16	17	9/9	18	2	17
B		3	2	2		6	0	3	0
		7	3	5		8	3	13	3
	x	12	17	15		8	19	3/3	19
C		8	1			0		3	
		3	3			5		14	
	x	11	18			13/4		5	

- 1．はじめまして等
 2．（名前）と申します
 3．（出身）からまいりました
 4．（専門・所属）しております
 5．（専門）を選んだのは、～からです。等
 6．（住まい）に住んでおります
 7．（計画しよう）／したいと思っています等
 8．よろしく

全体的に、正しくメモを取れている日本人は少ない傾向が現れた。もともとの録音に情報がない場合はもちろんであるが、録音での情報があるものでも、正確には伝わっていないことが窺われる。次に個別の問題について見ていくことにする。

3．2．1 名前と国と出身のメモ取り

自己紹介において最も大事な基礎情報は名前である。外国人の名前に慣れていない日本人にとってみると、名前はだけは聞き逃さないようにと注意して聞くことが容易に想像できる。もちろん外国人の名前は一般的に聞き取りにくいとは言えるが、今回の結果から、半分近くの日本人しか正確に聞き取れないことがわかった。それぞれの学習者の名前は元々の名前を日本語に近い音に直して言うようにという指導がされているが、まだまだ不十分であることがわかる。

また国について、AとCは聞き慣れた国ということで、国自体の名前は聞き取れていた。Bの学習者の国は「スロベニア」であるが、「スロバキア」「スロバニア」などと書いている日本人も多かった。日本人学生の世界に地理に関する馴染みの深さにも関連はあると予想されるが、普段あまり聞いたことがない国の場合は留学生側に特に発音上の注意が必要であると言える。

出身を述べている学習者もいる。出身は文型・会話クラスの指導では、出身大学のことを主に想定していた。そこで学習者は次のような表現を使っていた。

B1： 出身大学はリュブリアナ大学です。

C1： 中国の新陽工業大学で溶接専門をいたしました。

ところがB1の「リュブリアナ大学」を聞き取り、メモを取っていた日本人は6名と非常に少な

く、誰も正しくメモを取っていなかった。またCの場合は、「中国」はよく聞き取れていたが、「新陽工業大学」を書き取ろうとしたのは5名で、1名しか正答者はいなかった。B1の場合「出身大学」と言っていたことから、「出身大学についての情報が出る」という心構えは出来ていたように思えるが、それでも大学名は聞き取れなかった。

3.2.2 所属と専門のメモ取り

所属や専門に使われることばは今回の調査協力者にとってはあまり馴染みがないことばが多かった。筑波大学内部でのみ使われる学部名(筑波大では学部を学類という)や研究科名、また専門の名前も大学生、特に理科系でない大学生にとってはわかりにくかったと考えられる。

結果として、いわゆる大学院生レベルの専門を持っていないBの専門を聞き取るのが一番簡単だったようで、次いでA、Cとなっている。Bの場合は「日本語とイタリア語」であったので、非常に聞き取りやすかったようである。Aは「～専攻しております」という表現を使っており、2度目の録音を流したときに「言語障害」ということばを聞き取った日本人が多かった。

3.2.3 その他の基礎情報のメモ取り

趣味の部分のメモ取りにはC以外の録音は問題がなかったようであるが、Cは「旅行」の意味で「遠征」をもちい、それを「エイセイ」と読んだために非常にわかりにくかった。調査後の協力者へのインタビューでは、何を書き取ったらよいのか、わからなかったという感想を述べていた。

将来の計画について、Aのメモ取りはよくできていた。しかしBは、

B2: 将来はまだはっきり決めていませんが、日本に関係ある現代社会か芸能か芸術について仕事したいと思います。

と述べていたが、「芸術」のみを書き取っていた日本人が19名で圧倒的に多かった。「現代社会」「芸能」「芸術」と比較的音が似ている語彙を続けていたこと、それぞれの発音が不明瞭であったことが関係していると考えられる。

3.2.4 表現のメモ取り

表6を見るとわかるように、全体的に表現のメモ取りで、正しく聞き取り、メモを取っていた日本人はほとんどの場合10名以下で、表現について何もメモを取っていない場合も非常に多かった。しかし、表現から得られる情報を何も聞き取っていないのかというとはそうではなく、たとえば「まいりました」を「来た」とメモを取っているようなケースがかなり見られた。

また基礎情報には入れなかった「専門を選んだ理由」についての聞き取りは、どの録音でも記述が少なかった上に、記述がある場合でも誤解して書いている場合があった。たとえば、Aの場合を見ると、

A1：私がこの専門を選んだのは、私が障害を持っている子供と共にいたいからです。

という理由を「私が障害を持っている」とメモを取っている日本人が9名もいた。録音を聞くと、A1の「私が障害を持っている」の後に少々長いポーズがあり、そのことも誤解を招く原因を担っていると考えられる。文がある程度長く、連体修飾などがある場合、ポーズの置き方にも注意が必要である。

外国人の発話を聞いている日本人にとって、表現情報はどんな意味を持っているのだろうか。予想できることは、表現情報の聞き取りに慣れていない日本人は、基礎情報が聞き取れた時点で全体の内容が聞き取れたように理解しているということである。この点を明らかにすることは今後の課題である。

3.2.5 全体の評価

各録音を全体として、どう評価するかという質問をしたところ、以下のような結果を得た。各質問は次の3つである。

- 1) 学習者の表現・文法などは自分が知っている最も日本語が上手な外国人を5として、どのくらいか、5段階で評価する
- 2) 学習者の発音やアクセントなどは自分が知っている最も日本語が上手な外国人を5として、どのくらいか、5段階で評価する
- 3) 自己紹介としてどうであったか、自分で考える最もよい自己紹介を5として、5段階で評価する

表7. 全体の評価の平均

	質問 1	質問 2	質問 3
A	3.5	3.7	4.2
B	4.0	4.0	4.4
C	2.7	2.1	3.0

表を見ると明らかなように、A、BとCには大きな評価の差がある。AとBには大きな差はみられない⁽⁶⁾。

日本人が録音を聞いた後に書いた自由な意見、コメントもまとめてみる。(複数回答)

< Aについて >

- ・ 大体言いたいことがわかった。(7名)
- ・ 一生懸命話しているような感じがする。(3名)
- ・ 発音が不明瞭、聞き取りにくい。(5名)
- ・ はっきりしていて聞き取りやすい。(2名)
- ・ 早口である。

- ・語尾が伸びすぎている。

- ・アクセントが変だ。

< B について >

- ・発音がいい、聞き取りやすい。(6人)

- ・聞きづらい。(1名)

- ・名前が聞き取れない(3名)

- ・個別な語彙の発音が変だ。(2名)

- ・文法が変だ。(3名)

- ・ことばとことばがつながってしまうような感じがする。

- ・口にこもったようないい方をする。

< C について >

- ・聞き取りにくい、何を言っているのかわからない。(18名)

- ・一生懸命な感じがする。(2名)

- ・文法、語彙がおかしい。(3名)

- ・文はよい。(3名)

- ・同じことを2度くりかえす、つかえる。(各1名)

- ・アクセントが変だ。

- ・「とか」の使い方が変だ。いい。(各1名)

調査に協力してもらった学生は日本語の音声関係の授業を受講している学生であったため、おそらく一般の日本人よりも音声や音韻についてのコメントが多くなっている。全体の評価とコメントをまとめて考えると、圧倒的にCについての「聞き取りにくさ」が強調される結果となり、全体への評価も音声的な問題が響いていることがうかがわれる。

また少数ではあるが、「一生懸命な印象」という意見もあった。何がそう感じさせるのかは不明であるが、少なくとも自己紹介の場合、自分のことを相手に伝えようという意志がはっきりと伝わるような話し方ができていたから、そのような意見を持ったのだと思われる。自分に身近なことを話すということは、話し手である学習者の積極性を引き出すためにも重要なポイントであると考えられる。

3.3 考察

今回の調査の結果から、自己紹介という内容の録音のどこが聞けているのかという点についてはある程度の情報を得ることが出来た。まず、基礎情報と表現情報の \times の分布を見てわかるように、表現情報に比べて基礎情報で \times が多くなっている。つまり、日本人学生は自己紹介の際に必ず出て来る基礎情報をつかもうと努力しているのであろう。三牧(1999)の調査結果から日本人同士の初対面場面では話題選択スキーマが存在することが認められた。同じように、他の人から自己紹介さ

れる際にどのような情報が期待できるか、について共通の認識があると予想できる。その基礎情報をつかむ作業で、馴染みのないことば(国名、研究科名、専門名など)が出てくるとある程度は推測を行うが、推測も出来ない場合は自然にメモ取りをしなくなったと考えられる。また、基礎情報について日本人がきちんと書けるような形で聞こえてこない場合に、「聞き取りにくい」という評価が出て来やすいと思われる。

三浦他(1998)によると、日本人学生の方が日本語教師より留学生のスピーチについて、音声に関する間違いの指摘が多いという結果が出ている。本稿の調査は「聞き取り」ということを強調したものであるが、「評価」を強調した調査との間に、日本人側の意識に差がある可能性がある。

また文型クラスで強調されている表現は、実際のメモ取りの作業には表面に現れてこなかった。しかし基礎情報をつかむ際に手がかりとして表現情報が利用されているということが予想できる結果が得られた。「私の名前は」と聞こえれば、その次には必ず名前が来るはずで、その部分を集中して聞こうとする意識の結果、「私の名前は」や「と申します」などの表現情報がメモ取りには現れてこないであろう。

一方、あまり全体の評価が高くなかったCの録音についても、「文はよい」などの意見があったが、実際の文字化資料を見ると、文法的な誤りは多くある。このことから、日本人学生が表現情報をどう聞いているのかは疑問である。あまり不自然な文法や表現が使われていなければ、つまり、それらしく聞こえていれば間違っていない、大きな違和感がないのかもしれない。この点については今後の課題としたい。

4. 会話クラスの改善に向けて

基礎情報のメモ取りが予想以上に出来ていなかったことは、会話クラスの指導者としてショックだった。会話クラスで日本人と共に練習をした後の録音であったにもかかわらず、必ず伝達しなければならない情報が伝わらないことは大きな問題である。

調査の結果からすぐに改善すべき点として、以下の点があげられる。

- ・ 名前、国、出身地、出身大学などは日本人がわかるような発音、アクセントで言わせる練習を多く取り入れる。
- ・ 所属、専門など日本語ではあるが、馴染みのないことばの発音、音韻上の特徴を十分に理解させ、練習させる。
- ・ 表現練習の段階からその場面・内容にふさわしい表現・文型を十分に理解させた上で、自分の話したい話題を使った練習を充実させる。
- ・ 日本人(学生)ボランティアの方にも音声・音韻について可能な範囲で指導をし、グループ活動の際に活かせるようにする。

音声・音韻が正しくないとどのように日本人に聞こえるのか、またそれはどのような印象を日本人に与えるのかなどを学習者にコースの最初の時点で理解させる努力をする必要も強く感じた。

会話クラスの日本人（学生）ボランティアには、全く日本語教育に関係がない方がいいのかどうか、という点は問題である。今回の調査では、日本語教師養成コースで学習している学生に協力してもらったが、日本語教育に関する知識があったほうが、会話クラスの教師と学習者の仲介者として、このレベルの学習者には適当であるような印象を筆者は持っている。会話クラスのアシスタントのあり方については今後検討を続けたい。

また、中長期的には、音声・音韻に関する基本的な知識を学習者に有効に与える教材が必要になると考える。たとえばアクセントについての簡単なルール、種類を知っていると新出語彙の学習などにすぐに役立つ。現在改訂中の中級1にそれが盛り込めるかどうかは不明であるが、検討に値する課題である。また音声・音韻の改善には時間がかかることから、どのような自習が可能であるのかも考える必要があり、さらには教材全体でどのように音声教育を考えるのか、なども重要であろう。

< 謝辞 >

本稿をまとめるにあたり、資料として使うことを理解してくれた3人の学習者、調査に協力してくれた筑波女子大の皆さんに心から感謝いたします。

注

- (1) 留学生センターでは中級レベルを、中級入門・中級1、2、3、4に分けている。筆者が関わっているのは中級1レベルで、そのレベルは文型に週3時間、会話・読解・聴解・作文に各1時間で週に計7時間とし、漢字クラスをオプションとしている。
- (2) 作業グループのメンバーは加納千恵子、衣川隆生、小口淑枝、長能宏子、戸田貴子、金久保紀子の6名である。
- (3) 「まとめて言ってみよう」は各ユニットの終わり、あるいはユニットをいくつかまとめて長い発話をさせる活動である。
- (4) 同じ作業メンバーで「中級表現練習2」も作成中である。
- (5) 筑波女子大学で副専攻日本語教員養成コースで学習している学生を対象とした。
- (6) 念のため平均値の差の検定を行ったところ、AとBには差がなく、CはA、Bと差があった。

参考文献

- 1. 松崎寛・河野俊之(1998)『よくわかる音声』アルク
- 2. 三浦香苗他(1998)「留学生の口頭発表に対する評価を探る - 本当に伝えたいことが伝わるためには何が必要か - 」『金沢大学留学生センター紀要』1pp.1-17
- 3. 三牧陽子(1999)「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー - 大学生会話の分析 - 」『日本語教育』103号 pp.49-58

<文字化資料>

録音 A

皆さんはじめまして。私の名前は と申します。私は今年4ヶ月に韓国のテグからまいりました。私は今、教育研究科に所属しております。私は筑波大学の言語障害に、障害を専攻しております。私は、私がこの専門を選んだのは、私が障害を持っている子供と共にいたいからです。私はいま筑波大学の一の矢宿舎に住んでおります。私は料理に興味があるので、うちでいろいろな食べ物を作ることが大好きです。私の性格は、私が考えて、けじめがあるほうだと思っています。私は将来に、私の国へ帰って障害を持っている、持っている子供を治療をしようと思っています。皆さんをおめにかけて、とてもうれしいです。どうぞよろしくお願いします。

録音 B

皆さま、こんにちは。はじめまして。私は と申します。今年4月にスロベニアからまいりました。出身大学はリュブリアナ大学です。そこで日本語とイタリア語を専攻しております。今、筑波大学の日本語・日本文化学部所属して、平砂宿舎に住んでおります。日本文化や社会や歴史、別に現代芸能に興味があるので、この専攻を選びました。将来はまだはっきり決めていませんが、日本に関係ある現代社会が芸能か芸術について仕事したいと思います。飛行機に興味があって、その上飛行機を操縦ができます。性格は楽天的な明るい方だと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

録音 C

自己紹介させていただきます。こんにちは。私は と申します。中国の新陽工業大学で溶接専門をいたしました。3年前に妻と一緒に筑波大学に来て、今年4月頃研究生として入学しました。河合先生にしたがって、あの金属の溶接性について研究していきたいです、いきたいです。エンジニアとしていろいろな金属溶接性問題にあったことがありますので、あー、だから今のこう、構造工学専攻を選びました。留学するあいだに、あの話せるとか、書けるとかあの一読めるとか、読めるとか、みんな全部上手になりたいと思います。私の趣味はエイセイです。いろいろなところ、日本のいろいろなところに行きました。あの、卒業してからあの一国へ帰って、もとの仕事をやって続いて行きたいと思います。